

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H00550

研究課題名(和文) アーカイブズによる「地域力」再生と持続的社会の基盤創成研究

研究課題名(英文) Development of new foundation for the sustainable society and regional regeneration by Archives

研究代表者

加藤 聖文 (Kato, Kiyofumi)

国文学研究資料館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：70353414

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 35,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「全国消滅危機アーカイブズ・データベースの構築」、「海外参考事例の調査研究」、「研究対象地域におけるモデル化実験」の3つの目標を立てたが、コロナ禍により計画を大幅に変更せざるを得なかった。特に、モデル化実験に関してその影響が大きかった。ただし、その他の目標については、コロナ禍にもかかわらず概ね計画通りの成果が得られた。アーカイブズ・データベースの構築に関しては、西日本および東海地方、ならびに南東北地方の自治体史を中心としたデータをほぼまとめることが出来た。さらに、海外調査ではAtoMに関する最新の研究知見を得ることができ、本研究でも初期的段階での実験を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の日本は21世紀に入ってからの世界的な社会変革に加えて、少子高齢化が重なったことで不透明感が増している。とくに地方の衰退は顕著で地域コミュニティは解体の危機に直面していることが本研究の中でもはっきりと確認できた。本研究は地方再生の第一歩として情報基盤の整備と海外の実例を集積することができた。今回はコロナ禍によって未達成になった住民参加型自治にアーカイブズを取り入れる実証実験を本格的に稼働させるプロジェクトを立ち上げる予定である。

研究成果の概要(英文)：We had set three goals for this study: (1) "Establishment of a National Database of Disappearing Archives," (2) "Research and Study of Overseas Reference Cases," and (3) "Modeling Experiments in the Study Area," but the Corona disaster forced us to drastically change our plans. The impact of the modeling experiments was particularly large. However, the other goals were generally achieved as planned in spite of the coronal disaster. Regarding the construction of the archives database, we were able to compile data mainly on municipal histories in western Japan, the Tokai region, and the southern Tohoku region. Furthermore, we were able to obtain the latest research findings on AtoM through overseas research, and were also able to conduct experiments in the initial stages of this study.

Translated with DeepL.com (free version)

研究分野：アーカイブズ学

キーワード：アーカイブズ 公共政策 人口減少 地方再生 地域コミュニティ 公文書管理 情報公開 持続的
社会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

20 世紀末に起きたインターネット革命によって人々の生活や価値観は大きく変わった。日本も例外ではなく、時代の変化の速さは政治・経済・社会・文化のあらゆる面に大きな衝撃を与えているといえる。しかも、日本は少子高齢化と地方衰退が重なったことで時代の急激な変化に対応できないまま社会構造が崩壊する可能性すら否定できない。

研究代表者はこれまで資料調査のために全国各地を訪れるなかで、地域や組織、家族といった共同体をめぐる環境がメディアで報じられる以上に深刻かつ問題が構造化していることを痛感してきたが、この傾向は年々悪化しているといえる。

社会的存在である人間の存在を精神面から支える共同体の危機は、基礎自治体の財政悪化や労働力不足による産業競争力の低下、社会保障費の負担増大といった社会科学的な課題に止まらず、人文学にとっても深刻な課題といえる。例えば、家族意識の希薄化によって親類という横軸はもちろん親・子・孫という縦軸も断絶することで家伝来の歴史資料が消滅したり、地域共同体意識の消滅によって共同体で守られてきた公文書が廃棄されたり、企業や市民団体でも組織の結束力が弱まるなかで活動記録が放置されるという事例が頻発している。

研究代表者が把握している例では、町内の前近代から続く旧家の 80%がすでに町を離れたが、小規模な町立博物館が文書調査も出来ずに放置状態にされていたり、明治から昭和戦後期までの大量の合併町村役場文書があるものの、専用の保存施設がないため、空調施設もない廃屋に放置されているなど、全国的に深刻な状況にある。しかも、平成の大合併によって市域が異常に広大な地域では、合併された旧町村役場の廃止と小中学校の統廃合によってかつての街の中心部が消滅した結果、人口流出が加速化し合併前の旧共同体は急速に解体し、アーカイブズをめぐる環境は加速度的に悪化しつつある。

このような地方の現状に対して、財政事情が厳しい基礎自治体は単独で対処できず、また、ボランティアとして期待できる地元の人材も不足、結果的には旧来型の国・県の財政支援に頼って「インバウンド需要」や「にぎわい復活」といった「延命治療」に翻弄されるなかで「緩慢な死」を迎えていくと思われる。このような事態は地方に限ったことではなく、多摩ニュータウンなど郊外の新興住宅のような都市部においても例外ではない。また、近年では首都圏所在の団体（農協のような準公的機関から平和運動の市民団体にいたるまで）が解散または規模縮小による所蔵資料の廃棄、個人の相続時の家屋売却または建て替えによる文書の処分といった都市部固有の課題が顕在化している。

また、幸運にも博物館などに収蔵されたとしても、予算と人材不足から事実上の放置状態になっているケースも数多い。山形県南陽市の結城豊太郎記念館は地元出身で戦時中の元蔵相だった結城豊太郎の個人資料を収蔵・展示しているが、学芸員も配置されていないため膨大な資料群の一部を展示するだけでその他は未整理のまま収蔵庫に眠ったままであり、目録もないため外部にはどのような資料があるかも分からない。

これら具体例は研究代表者が関わっている一例に過ぎない。戦友会・引揚者団体から学校同窓会にいたる小規模組織、地方政治家から一兵士にいたる歴史の証言となり得る個人の文書まで含めると膨大な数にのぼるが、社会的にほとんど知られないまま、今後 10 年以内で大半は消滅していると思われる。

2018 年は明治維新 150 年といわれ、全国各地で維新関連の企画や資料のデジタル化が行われている。しかし、これらは大半が一過性のイベントであって、現実となっている深刻な課題に向き合い、中長期的に地域をどのようにしていくのかについて議論が深められることはなかった。顕在化している地方衰退にともなう共同体の解体は、明治以来日本が進めてきた中央集権型近代国家の帰結であって、維新 150 年は近代の国家そして地域のあり方そのものを問い、地域共同体の再生・再編を考える起点にすべきではなかったのか。

では、このような危機的状況に対して人文学は何ができるのであろうか。研究代表者は、現在の問題は社会構造および人々の意識の根本的な変化によってもたらされている以上、即効性を期待した実学的アプローチではなく、地道に問題の本質を究明する人文学的アプローチが必要であって、そのアプローチの基礎となるものがアーカイブズであると考え、本研究の構想にいたった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、21 世紀型社会におけるアーカイブズの重要性に着目し、現場での活動経験が豊富な若手を中心とした学際的研究者と地方衰退に危機感を持つ地元関係者の協業によって、自治意識の育成モデルを構築して地域共同体の再生を目指すこれまでにない試みであり、学術的独自性と創造性もそこにある。

共同体（地域社会以外の組織や家族も含む）の営みによって生成されたアーカイブズは、それ

を生み出した共同体の歴史を示すものであり、共同体構成員にとってアイデンティティとなるものである。そして、アーカイブズが存在は共同体の変化と密接な関連を持つ。共同体が強固な場合、そこで生成されたアーカイブズに対して構成員の関心も高く、共同体として守り伝えようという意識が強い。一方、弱体化した共同体ではアーカイブズに対する構成員の関心が低下し、その管理は杜撰になる。実際、国家から企業、家族にいたるまで崩壊過程においてアーカイブズの扱いが杜撰になることは共通する。アーカイブズの消滅は共同体の消滅と同時になく、共同体が弱体化する段階から始まっているのである。

すなわち、アーカイブズの現状を見ればそれを生成した共同体の現状を認識することが可能である。これを逆転して発想すると、弱体化した共同体においてアーカイブズを再生の基礎と位置づけ、共同体構成員のアーカイブズへの関心を高めて再活用を図れば、共同体を再生または維持することも可能という仮説が成り立つのではなからうか。

本研究は、このような課題解決への接近方法としてアーカイブズの重要性に着目する。具体的には、(1)で述べた問題意識を基に研究対象を地域共同体に絞り、アーカイブズを公共記録として再定義し、住民の自治参加を促すモデルを試行することを目的とする。

アーカイブズについて、その概念的な重要性は近年になって社会的にも認められつつあるが、実社会における有用性を市民の誰もが認識しているとは言い難い。また、その有用性を証明しようという学術的研究も進んでいないのが現状である。もちろん、災害時における被災アーカイブズのレスキューやアーカイブズ情報のネットワーク化といった研究は東日本大震災以降、活発に行われるようになってきている。また、本研究が対象とする人口減少時代における共同体の解体という大きな課題に対して、その影響をもっとも強く受けるアーカイブズをいかに守るかについては、研究者や地元の関係者らは強い関心を抱き、全国歴史資料保存機関連絡協議会（全史料協）や地方史研究協議会など関連諸団体においていくつかの現状分析が発表されている。しかし、いずれも危機的現状の把握と課題の抽出に止まっており、しかもこれらの課題提起は研究者間の狭いコミュニティ内で共有されるだけであって、一般社会ではほとんど知られていない。一方、2011年の東日本大震災による福島原発避難自治体での復興ボランティアや2014年に日本創成会議が唱えた地方消滅論に対する反論として、地域社会を巻き込んだ実践的な取り組みも活発になっている。しかし、経済需要喚起や移住促進といった政策的研究から祭礼復活などの社会文化的研究にいたるまで幅広く行われているなかで、アーカイブズはあくまでも観光資源や地域歴史文化再認識の「道具」という位置づけに止まっている。さらに問題なのは、21世紀型社会を見据えた中長期的展望からではなく、現状の悪化をいかに食い止めるかといった短期的視野からの現状対応型研究であるという点である。

これまでアーカイブズは、本質的に持つ歴史性に影響されて伝統文化の重要性を訴える素材として扱われがちであった。いわば、過去を振り返るばかりで私たちの社会は現在どのように成り立っており、これからどのように向かっていけば良いのかといった現代的課題には十分応えてこなかったといえる。

研究代表者は、21世紀の現代社会は19世紀以降の近代社会とは構造が根本的に変容しており、強い政治権力への依存や伝統回帰では衰退に歯止めをかけることはできないと考える。これからの時代は自ら課題を自らが認識し自らの力で解決する自治意識の有無が地域の将来を左右するのであって、本研究はそのような認識に立ち、自治意識を育てる種となるアーカイブズを未来に向けて積極的に再活用しようという試みである。研究メンバーも女性を含めた若手中心で構成され、機動力と積極性を武器に課題に取り組む - いわばこれまでの「守り」の研究ではなく、「攻め」の研究であることが最大の特徴といえる。

また、インターネットを基盤とする21世紀型社会は国際的な大きな流れの影響を受けている。すなわち日本で起きている状況は決して一国だけの孤立した問題ではなく、諸外国においても類似の状況は発生している。本研究は日本と同じ社会規模で地域社会におけるアーカイブズの活用が伝統的に盛んなイタリアと日本と同じ発展過程を辿りながら少子高齢化が急速に進んでいる韓国、アーカイブズを地域自治に先進的に活用している英国を比較対象として取り上げ、これらの国では住民自治そして共同体維持にアーカイブズを位置づけ、活用しているのかを調査し、現地研究者らと意見交換を積極的に図ることで、日本国内への応用に役立てる。このような国際的視野からの具体的な取り組みは初めてのケースとなる。

3. 研究の方法

本研究は、上記の問題意識と目的を出発点として、「全国消滅危機アーカイブズ・データベースの構築」、「海外参考事例の調査研究」、「研究対象地域におけるモデル化実験」の3つの柱を立てて研究を遂行する。このうちとは基礎情報集積、はとを踏まえた中核的実践研究と位置づける。なお、本応募研究は、後継研究「構築モデルの全国的応用研究」へと発展する基礎研究と位置づける。

「全国消滅危機アーカイブズ・データベースの構築」については、日本国内の基礎自治体単位でのアーカイブズの現状を調査し、「全国消滅危機アーカイブズ・データベース」を構築する。具体的には、まず、全国で刊行された自治体史および平成大合併時に一部の都道府県立文書館によって行われた現況調査を基に数年前まで国内で確認されていたアーカイブズの概要情報をまとめる。次に実際の地方調査などを通じて確認できた消滅または消滅危機にあるアーカイブズ

情報を付加し、最終年度にデータベースを完成する。

「海外参考事例の比較研究」については、対象国であるイタリア・韓国・英国での調査と現地研究者らとの情報交換を行い、最終年度に開催するシンポジウムへの協力体制を構築する。具体的には、イタリアではトスカーナ州における地域共同体におけるアーカイブズ保全とその活用、さらには住民のアーカイブズに対する意識調査を行う。また、韓国では仁川広域市における市民主導のアーカイブズ活動、民主化運動記録館における民間団体アーカイブズの保全と社会還元の活用事例を調査する。英国では英地方自治におけるアーカイブズ活用と自治担当者向け教育プログラムの調査を行う。この他、人口僅少地域における共同体維持に対するアーカイブズの活用、市民によるアーカイブズを通じた行政参画の先進事例調査、大学と行政が連携した地域アーカイブズ活動の先進事例調査を行う。

「研究対象地域におけるモデル化実験」は、離島・旧城下町・都市近郊・市町村合併などの特徴を持つ基礎自治体において文書館・郷土資料館・教育委員会などの協力を得ながら地域の現状を把握のうえ課題と可能性を抽出する。その後、少子高齢化と広域合併による空洞化が共通する大仙市と天草市でアーカイブズ活用モデルの策定に着手する。具体的には 市民のアーカイブズ協力参加プログラム（調査収集と整理・リスト作成と情報発信）、小中学校向けアーカイブズ教材（住民自治の仕組み・地域文化の歩み）、市職員向けアーカイブズ活用マニュアル（記録管理による行政効率化・公文書を通じた市民の自治参加促進）、以上3つの開発を行う。

4. 研究成果

本研究は開始直後から新型コロナウイルス拡大による影響を受けたため、当初から計画の大幅な見直しをせざるを得なかった。とくに海外および国内調査、およびそれに伴うモデル化実験に関しては、当初の目的達成のための計画を大きく変えざるを得なくなったため、成果は研究開始時点で想定していたものとは異なるものとなった。しかし、限られた状況のなかでもいくつかの進展は見られ、後継計画へと繋がる基盤はある程度構築できたと考える。以下、3つの柱ごとに具体的な成果を挙げる。

「全国消滅危機アーカイブズ・データベースの構築」については、日本国内の基礎自治体単位での自治体史（自治体が刊行した資料集・調査報告書・写真集・字誌なども含む）の悉皆調査を行い、九州・沖縄地方、四国地方、中国地方、関西地方のほぼすべて、および中部地方、関東地方・東北地方・北海道地方のおよそ6割のデータを集めることができた。収集対象データが予想以上に多かったため、完成版のデータベース構築にはいたっていないが、後継計画での完成が見込まれることになった。

「海外参考事例の比較研究」については、コロナ禍前に実施することができたイタリアのトスカーナ州での調査が大きな収穫となった。調査では、トスカーナ文書・図書保護局の協力により、ポルト・フェライオ市およびフィエーゾレ市が小規模自治体ながらも積極的なアーカイブズ収集方針の樹立、アーキビストによる行政文書の評価選別から民間文書の保存活用にいたる幅広い活動、市民ボランティア参加による官民協業の具体的な事例について詳細なレクチャーを受け、日本での応用の可能性を確認することができた。コロナ禍による渡航制限によって海外調査は計画通りには進まなかったが、初年度のイタリア調査の成果は大きく、いくつかの論文に生かすことができた。また、2022年にローマで開催されたICA（国際アーカイブズ評議会）にも参加し、南アフリカにおけるコミュニティ・アーカイブズの取り組みなど先進事例を知ることができ、あわせて国際的な人的ネットワークを作ることもできた。

「研究対象地域におけるモデル化実験」は、コロナ禍の行動制限によって当初から計画が中断してしまっていたが、大仙市ではオンラインを使って市民向けの公開講座を行い、アーカイブズの重要性を市民に発信することはできた。また、当初計画にはなかったものの、高知市において活発に行われている資料保存活動に参加し、市民向け公開講座での講演も行った。高知での取り組みは民間主導で役場文書から現代の民間資料まで幅広いアーカイブズを対象とするという特徴を持ち、当初想定していたモデルの再検討が必要となるものであった。後継計画では、高知モデルを取り入れたものとする事とした。

この他、当初の研究計画には明記されていなかったが、研究実施中にアーカイブズの情報発信基盤としてAtOMの重要性が明らかになり、システム構築研究に取りかかった。その関連として2023年にカナダのプリティッシュ・コロンビア大学で開催された国際会議に研究メンバーが参加し、一部の成果を報告することができた。このように、研究期間中にコロナ禍ながらも若手メンバーを中心に海外研究者らとの交流が深まり、海外学会での報告および論文の発表が盛んに行われたことは大きな成果であったといえる。

以上の成果を基にして、後継計画において本研究では未達であったモデル化を完成させ、全国的応用へと繋げる見通しはついたといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 橋本陽	4. 巻 22
2. 論文標題 電子記録の選別と鑑定：日本における実践指針の提示	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都大学大学図書館研究紀要	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本陽	4. 巻 34
2. 論文標題 フォンド尊重	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 記録と史料	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本陽	4. 巻 34
2. 論文標題 インターバレス・プロジェクトについて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 記録と史料	6. 最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津美紀	4. 巻 54-1
2. 論文標題 社会的養護における記録 - 当事者への記録の開示とその留意点	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童養護	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津美紀	4. 巻 54-2
2. 論文標題 デジタル時代における子どもたちの記録の管理	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童養護	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津美紀	4. 巻 54-3
2. 論文標題 海外における社会的養護の記録管理 : オーストラリアとイギリスの現状と当事者運動からの学び	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童養護	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津美紀	4. 巻 54-4
2. 論文標題 当事者参加型の記録管理アプリケーションがもたらすもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童養護	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津美紀	4. 巻 34
2. 論文標題 「選別」と「評価」概念の再検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 記録と史料	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿久津美紀・高科真紀・蓮沼素子	4. 巻 5
2. 論文標題 民間所在アーカイブズにおける写真の公開・活用時の被写体への配慮に関する諸課題：比嘉康雄が写した地域写真を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 DNP文化振興財団学術研究助成紀要	6. 最初と最後の頁 210-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元ナミ	4. 巻 39
2. 論文標題 アーカイブズ記述の新標準：Records in Contexts (RiC)をめぐる最新動向と今後の展望	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本陽	4. 巻 36
2. 論文標題 電子記録研究の現在－2004年以降の回顧と展望－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 26-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本陽 / 元ナミ	4. 巻 6-3
2. 論文標題 アーカイブズ記述の新標準：Records in Contexts (RiC)の実装方法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 230-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯上良	4. 巻 44
2. 論文標題 Il fondo Marega e i suoi scritti	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Lucinis (ルチニーコ文化センター2019年度年報)	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田尚弘	4. 巻 178
2. 論文標題 天保の飢饉と村方の「救合力」 多摩郡後ヶ谷村杉本家文書から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多摩のあゆみ	6. 最初と最後の頁 20-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯上良	4. 巻 66
2. 論文標題 戦時のアーカイブズの保護・疎開 - 第二次世界大戦期のイタリア -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学習院大学文学部研究年報	6. 最初と最後の頁 227-252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯上良	4. 巻 -
2. 論文標題 翻訳: パチカン図書館所蔵のマレガ資料: 過去から未来へ人々の間に架け橋を築く	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際シンポジウム『マレガ収集日本資料の発見と豊後キリシタン研究の新成果』予稿集	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯上良	4. 巻 -
2. 論文標題 翻訳：教皇庁バチカン図書館の「マレガ資料」 過去から未来へ人々をつなぐ架け橋	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分・長崎交流講座『ヨーロッパとアジアの風がふくところ』予稿集	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 橋本陽
2. 発表標題 'AI vs HI：日本のアーカイブズの実務にAIを導入するための前提を考える
3. 学会等名 日本アーカイブズ学会2023年度大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本陽
2. 発表標題 Use of AI Tools in Local Governments and its Implications on Public Records Management
3. 学会等名 4th International Symposium, I Trust AI. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本陽
2. 発表標題 アーカイブズ記述標準の思想とその実践方法
3. 学会等名 自然科学系アーカイブズ研究会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 橋本陽
2. 発表標題 デジタル「アーカイブズ」の利用と保存
3. 学会等名 「稲盛和夫研究会」第10回研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本陽
2. 発表標題 電子記録のライフサイクル
3. 学会等名 近畿大学広報室建学史料室研究プロジェクト学内研究会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 橋本陽
2. 発表標題 近現代記録資料群の編成・記述の実践－欧米の基本書・マニュアルの有効性を検証する－「フランス・ドイツ・イタリアの基本書の概要」
3. 学会等名 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会第168回例会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 平井孝典
2. 発表標題 19世紀フィンランドの記録管理業務 スウェーデン国立公文書館の影響
3. 学会等名 記録管理学会2023年度大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平井孝典
2. 発表標題 アルキープ実務とトゥルク・ロマン主義
3. 学会等名 バルト=スキャンディナヴィア研究会7月例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 元ナミ
2. 発表標題 Disappearing Community 's Memory: Community Archives in Japan
3. 学会等名 The Archives & Records Association UK & Ireland 2023 Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 元ナミ
2. 発表標題 アーカイブズ記述の新標準: Records in Contexts (RiC) をめぐる最新動向と今後の展望
3. 学会等名 日本アーカイブズ学会2023年度大会企画研究会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 湯上良
2. 発表標題 ヨーロッパにおける基礎自治体の文書管理と専門職 イタリアの地方から日本のアーカイブズの明日を探る
3. 学会等名 第49回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 加藤聖文
2. 発表標題 災害対策と公文書管理 権利保護から地域再生まで
3. 学会等名 大東文化大学国際比較政治研究所・法学研究科共催2023年度シンポジウム「震災と復興をめぐる記憶と記録 伝承と文書管理の課題と可能性」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 湯上良
2. 発表標題 20世紀半ばの民間所在資料の保護を巡る国際的文脈
3. 学会等名 文化史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 元ナミ
2. 発表標題 アーカイブズ記述の新標準: Records in Contexts (RiC) の実装方法
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 湯上良 / ルーカ・ファルディ
2. 発表標題 最重要歴史的価値宣言の業務プロセス
3. 学会等名 西洋アーカイブズ史ウェビナー (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 湯上良 / クラウディア・サルミーニ
2. 発表標題 総督宮殿とフラリー教会：ヴェネツィアにおけるアーカイブズ
3. 学会等名 西洋アーカイブズ史ウェビナー（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高科真紀 / 阿久津美紀
2. 発表標題 写真メディアを軸とした沖縄祭祀アーカイブズ
3. 学会等名 2020年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿久津美紀
2. 発表標題 特別養子縁組に関する記録管理と利用
3. 学会等名 社会福祉法人国際社会事業団ライフストーリーワーク研修会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 湯上良
2. 発表標題 サレジオ大学所蔵マレガ神父関連資料とマレガ神父の研究について
3. 学会等名 マレガ・プロジェクト研究会「マレガ研究」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 湯上良
2. 発表標題 Il Fondo Marega della Biblioteca Vaticana: che cosa raccontano i documenti raccolti da Don Marega
3. 学会等名 In memoria di Don Mario Marega (1902-1978) Da Gorizia al Giappone Don Mario Marega tra memorie storiche e radici culturali (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 湯上良 / ディアーナ・マルタ・トッカフォンディ
2. 発表標題 文書保護局における近年の改革後のアーカイブズと図書館の保護
3. 学会等名 国際研究集会「民間史料保存におけるアーキビストと司書」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 湯上良
2. 発表標題 イタリアにおける「地域力」再生 - トスカーナ地方島嶼部および内陸部
3. 学会等名 「アーカイブズによる「地域力」再生と持続的社会の基盤創成研究」第1回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部宇洋
2. 発表標題 地域資料から読み解く地域像 - 資料をどう保存すべきか
3. 学会等名 山形県中山町郷土史研究会「郷土史講演会」(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Ryo Yugami	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Edizioni Ca' Foscari - Venice University Press, Fondazione	5. 総ページ数 306
3. 書名 Con licenza de' Superiori; Studi in onore di Mario Infelise	

1. 著者名 湯上良 / 下重直樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 243
3. 書名 アーキビストとしてはたらく：記録が人と社会をつなぐ	

1. 著者名 伊藤毅編 / 湯上良 (訳) マッテオ・ダリオ＝パオルッチ (著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 鹿島出版会	5. 総ページ数 536
3. 書名 イタリアの中世都市	

1. 著者名 ロバート・キャンベル編 / 太田尚弘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 336
3. 書名 日本古典と感染症	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青木 睦 (Aoki Mutsumi) (00260000)	国文学研究資料館・研究部・准教授 (62608)	
研究分担者	元 ナミ (Won Nami) (10783920)	東京大学・文書館・助教 (12601)	
研究分担者	橋本 陽 (Hashimoto Yo) (10882615)	京都大学・大学文書館・特定助教 (14301)	
研究分担者	平井 孝典 (Hirai Takanori) (20396336)	藤女子大学・文学部・准教授 (30105)	
研究分担者	湯上 良 (Yugami Ryo) (30772363)	昭和女子大学・人間文化学部・准教授 (32623)	
研究分担者	太田 尚宏 (Ota Naohiro) (40321666)	国文学研究資料館・研究部・准教授 (62608)	
研究分担者	阿久津 美紀 (Akutu Miki) (50823449)	目白大学・人間学部・助教 (32414)	
研究分担者	阿部 宇洋 (Abe Takahiro) (90815333)	山形大学・学士課程基盤教育機構・講師 (11501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------